武百十七号
チ 12
3508

門 チ12
號 3508
卷

觀世流正本

昇平小謡萬戸聲

觀世流謡本所
京二條御幸町西入
山本長兵衛

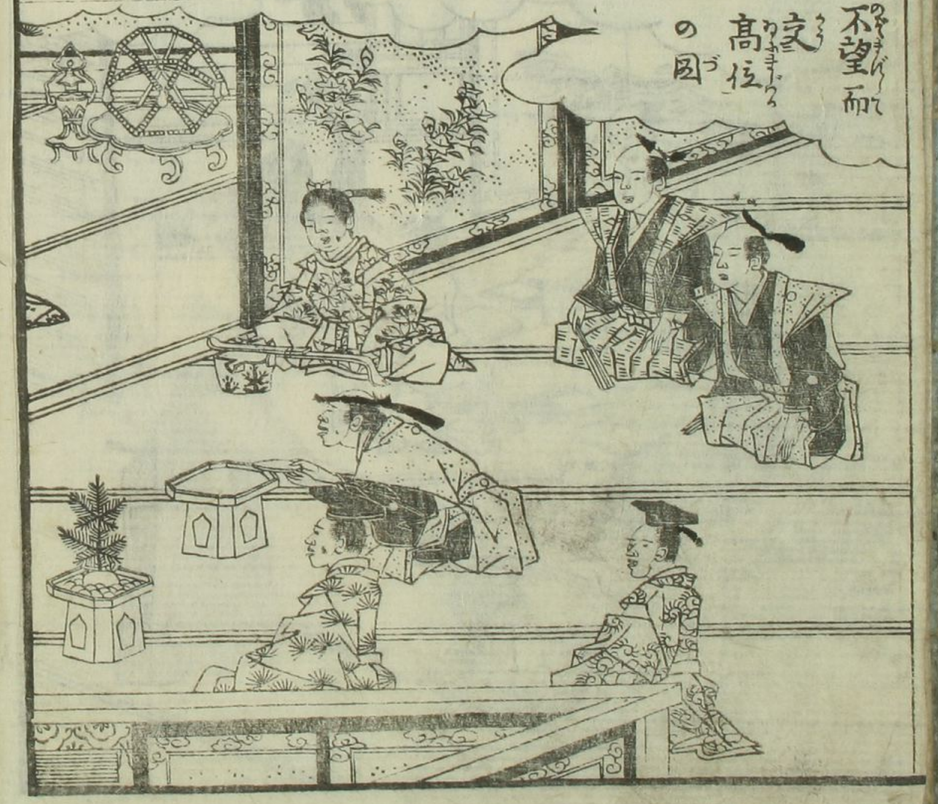
40 1265

謡曲十五番
注解

弘章堂

不行而知名所

流曲の流れ大概発源より其地にて名乃ち故郷幸社の来中式の人ゆゑに同じ其地の名所田源の故実和歌奇特文章ゆゑ式末と水乃ゆゑる知恵を生れの僧言葉乃縁起とゆゑ同じものをとゝしたるものなれば其国其地よりて遠つ国の古代縁起と人の



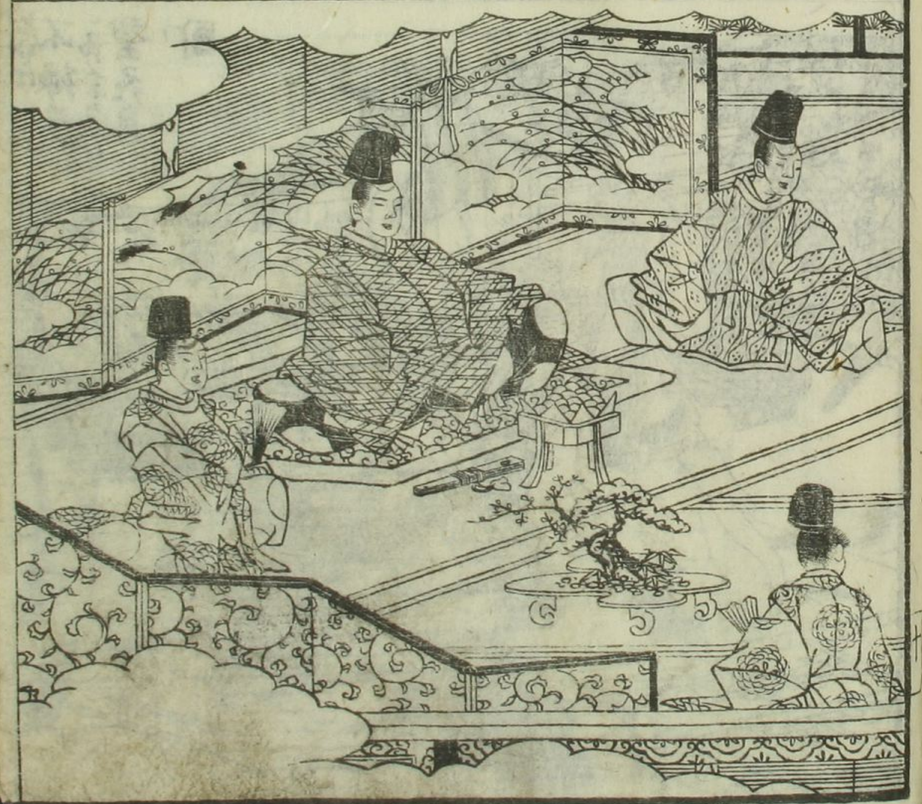
都と待とゝて来ゝ知る事深り速るゆゑ

五弦琴知音

弦乃ゆゑ体の人ものも深と考ゝて長遠の事と教ゝ知路乃旅と云れ取い遠境に方て国ゆゑ土の人よりていろゆゑ式教と深ゝ悟り魅ゆゑ知乃代暴言豪と魅し

不而識歌道

其才風格乃道ゆゑ



之代和歌の道を濫り古今
後撰拾遺集の三代後拾
遺金葉詞花千載新古今
の八代勅撰五部和歌
乃十三代の和歌の伊勢源氏
枕衣きて物語の文まく
宙しろくこれそなれ先達
みくもゝ

不緑而望三月

月ゆくもゝとい古歌と緑
清文まこ八ゆくして情と生
風雅のたゝふ京ゆくてゝ風
紅乃乃ふまゝ乃ふまた人

不緑而望三月の図

乃乃に微通ス

無支而魅困五花

古而の徒花に沉人ゆく
紅乃秋の眠り芝ゝ物情
ミたゝ行ゝふまゝ絵ゝ乃弱ふ
ゆゆ白淫ゝゆゆ歌人の文も
行て武々粋に濫の文を淫て
古奇代ゝ仏教の測度を
探ゝ古歌物乃世者ゝ淫て
風と熟む半濫典の徒乃

無支而教背氣

京芸の人武い疾痛なるゝ人

碁に対して浮世の憂を忘るへバ
自ら病苦を忘れ御身の若返り
ひきて深く病を忘れて病者の
と得る道なる是れ是れ
年頃に及びて病者寒き或いは
熱を発する時も顔を付けて
用ひて浮世と忘れてられバ
労気の憂を散じ悲気一時に
消る年寄の病は治る病は
是れ一術と謂ふべし

「不思而昇席」

浮世の道は其任に叶れバ
上手下手の先達の人は人の

碁十五道を何人の作すると知れバ一説に或ひ名人の
御作と謂り碁の道十名に限れるにもべしその
大概を述る事なれば古書の名にて見えてらず
又只碁を知ると云ひての〇新たに道の
大きるをべし。前浮世にたよりてよれおなし
と云べて中達して後に上達する手続きなるべし
の深刻なる物つぶべし。昔小笹道風流院仙と云ひ
ども達する事ならバ追庄し。既に古人の仙人を
時庭の池の上に一柳の枝の主たるに一の蛙この枝に
付んと飛べども飛べども。然れ四寸の手も飛び
中りたれハ一つ人絶る事を枝より飛付たり
是風は旗の切と続で柳がたるる所を
とげるて天下に能書と称れたる人は
そのもそげる様なべきなり

えん台とうけく社上に昇
して人の下に居るみ
「不望而交高位」
其所精して上る是人の御和
に通して則晴ぐ世俗の人或れ
遠席に連なる是碁出
勇年は加えとる和楽すれ
ばなり

「不老而知古事」

碁の法をそべて放を御を
引て言はりは広く書を
読まで和漢の故事に

無友而慰閑居図

遁じ去る孝高家臣母衣衆
と知りて自殺せんの心を遁
れ出でて又秀吉に知られ
の度大なる恩恵にあり
ふし

不戀而懷美人

無情の人なりとも恋ひて
美人と共に人情とは侵
し難きものなり逸題
なるべし初げ人の美
と浮る

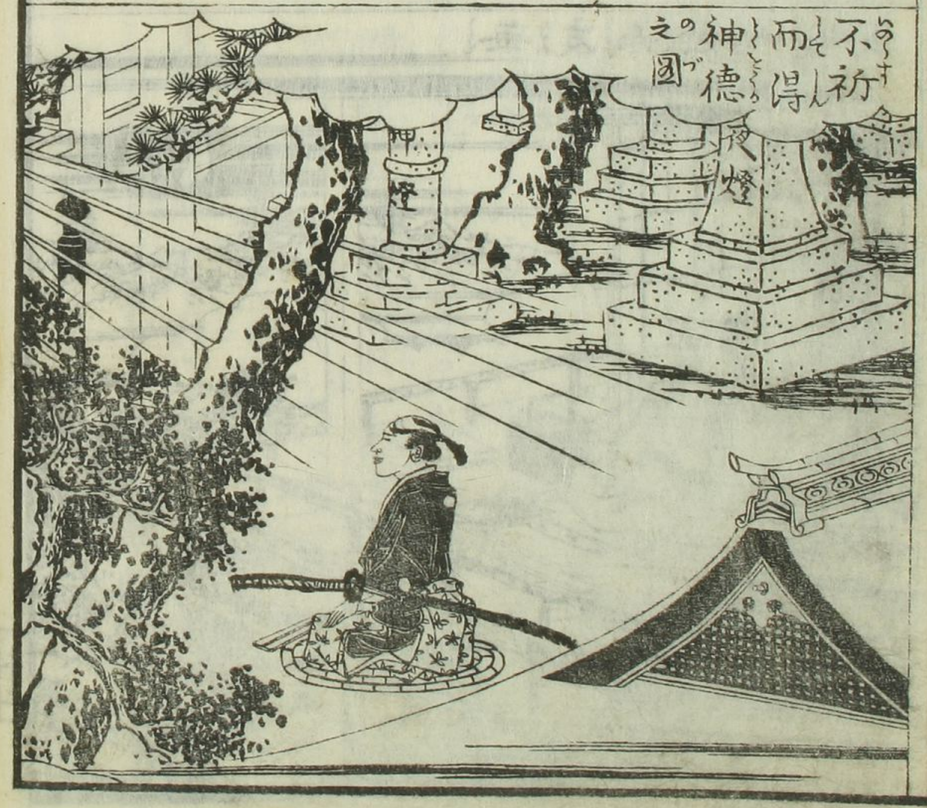
不利而近武藝

武門の家にあるべきて武
業成り軍備軍学の
名員と知る名将の骨髄
に達するべし

不軍而識戦場

古戦場の形勢武将官士
のち名戦功年月時日の歴
史と漢と要く知り来るべ
頭去ち作房の紀沙文弁
う勃進撃く其書とと
して全文とする

不祈而得神徳



神法を仰ぎ仏法と信じ法
仏閣に詣て法華経を聴聞仏
の真助と為り実に恃く
福者古来に為さしめ給ふを
千日万日の上の人間実に人
猶ら其例多し

不觸而知佛道

仏経に説て曰く心の濁
曲の中に仏を知ると云
要多は一向に仏を唱へて
二世の悪化を為仏法と云
知て十悪の境に入ること
仏に逆て

在旅而得知音

不巖而嗜形美

濁曲い和歌は一文に値する帝小き素花を着し
次に上下式を待て礼容を考へしと
濁に成て
先て濁どんが考へ礼を変へ礼はせつ
の使へ可く方体義よりて得て

小謡總目録

祝言部

高砂　同　志賀　蟻通
鶴亀　養老　同　嵐山　蟻通　岩舟
浦島　呉服　龍田　耶郭　同　讓法　猿通寺
御裳濯川

雪部

同　八嶌　二人静　西行櫻　寂覚　花衣　竹生嶋
小塩　氷室　杜若　鷺　雲雀山　女良花　雨月
同　同　紅葉狩　融　阿漕　三輪　松虫
頂羽　鉢木　竹雪　三笑　龍田

賀部

養老
同　同　鵜丸　源太夫　九十賀　同　浦嶌

家督部

現在鵜　淡路　鶏亀田　春榮　耶郭

元服部

烏帽子折　元服曽我　難波　梅枝　藤榮　粉川寺　花月部
鞍馬天狗　田村　同　同　西行櫻　同　吉野
鼓滝　恭山府君　竹生嶌　三井寺　小督　善知鳥　女郎花
鵜羽　酒宴部　國栖　大瓶猩々　綱　紅葉狩　地主
猩々　一角仙人　巴園　耶郎　祝言部　老松　白楽天
猩々　嵐山　難波　白鬚　養老　代主　大瓶猩々
鶴亀　金札　岩舟　高砂　殷物部　鵜飼　芦刈
海人　熊野　松風　感陽宮　俊寛　義平
小哥曲論義物語部　放下僧　軒端梅　安達原　鉢木　盛久
七騎落　摂待　藤戸　鞠　放下僧　烏帽子折　稲荷

雜祝言

高砂　婚姻賀　元服　渚祝義

漁　上ゑ

かけしも落葉ふれはさせぬわが宿をうり松
乃えのちりうせて久しかりをまさ木
のうつもるよはひかなりまはをさい
木の中あも名をうる砂の陰の代のさ
めにしも相生ぬ松をめでぬる

漁　上ゑ

同　首達

うる砂やせにしかとおもそはうろ

男兒教訓

夫天地の性人より貴は
人の行ひハ孝を第一とし
我一身ハ髪の毛にいたるまで父
母より稟得るものなれバ
少しも毀傷ぬやうに大切
にする孝の始なり又
毀傷とハ酒色に耽り怒
を発して人と争ひ
我身をそこなひて
怪我あやまちをし病
を求めず常に身を
つゝしむ事ハ我身は父
母の遺体なれバ大切に
我をたもつことハ父母の遺

ともに出しほの浪のおいちの浮かけや。いと
くするおのれさとれてとや住の江は君
かよゝに
かりし

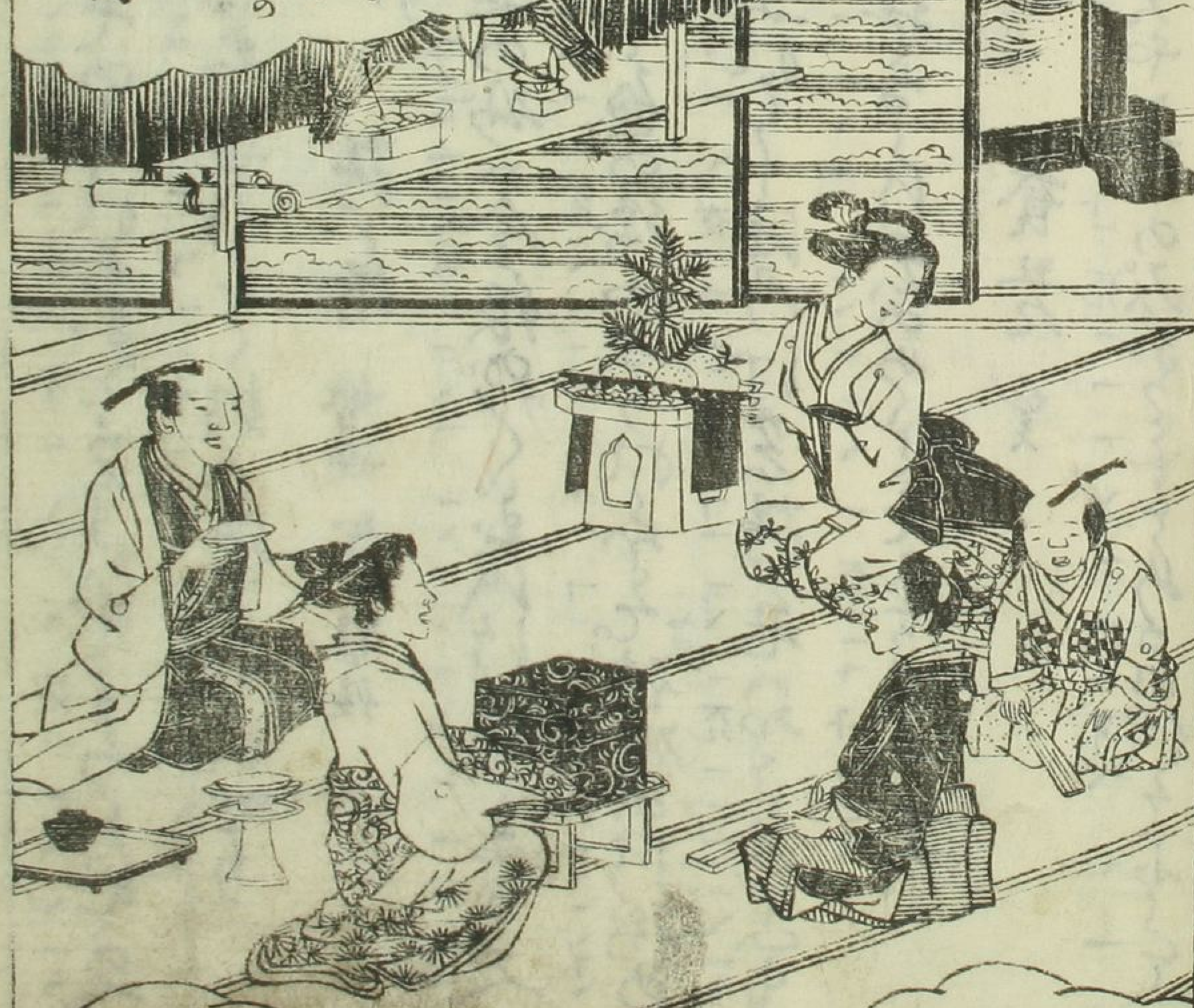
志賀

さひきまんの雲のさき四海や波の外
いろはのけんせんのきさかのとけ
まで
かゝりつる

嵯峨

中にもはつゆきかハ書きしも影うつりて

すれぬやうに身持を大切
にする事なり親の名を背かず
力に応じて親に孝を
つくし家業に精を出して
親を安楽にさせ候
ゆへなり次に家をよく治んる
ために父母の孝をさし
兄弟睦しく妻子を憐
みそれぞれに心を付て
よく治るやうにすべし一家諸
親和合して候へバ父母
の心もよろこばしく孝の一
ツとなるなり家の内にて
二人仲あしく家内諍ひあれ
ば必ず父母の心ハ安からぬ物



謡初の図

て贔負への沙汰となりて
家収るべからず只和をもて
よろこび喜て感じて家
業に精を出し父母の
名を我家によりて孝を
と孝の本にて人は萬の
業する天地の間によまれ
人として是に背かいぞ
人ならずんばや添ふかく
うやまふこの中
主人の為を思て家を
他に交る信ありて親を
とも孝中中使ふ家
家業へ支障和順して
家代々むすびまる者

まての前は志かどうちひてよろこひの
しるる世乃ためなる道とあらはせり

鶴亀　婚姻 賀 祝言

ワヨク上哥

庭の砂は金銀の玉を連ねて志きたへ
れいは魚の遊やるりかとて硨磲の行桁
すかうし池乃汀鶴亀は蓬莱山も
よそならぬ君の恵ぞありがたき

養老　賀

強上哥

実や玉水の水上すめる御代ぞ久しき

かう瀧の水の恵れ我らまでゆたかになるぞ
ふきりしさよく

同　酒宴

強上哥

ちくりんの七けんかたのしとてまちくさんか
おもしろひぞくぬのにのこらしらくめや
く先ことりと末れてわふさしけん

同　賀

ワヨク

袖ひちてむすふ手の水にみゆる山乃ね
の雲も若と立より花のよそほひ

○七徳教訓和歌　三嘉吉左衛門作

○ほくぐこと世ろこと世ろこまいまうらざる社まさるくそり

○ゑに筆もんれい社ゑもろ

上和

こゝ
こよ
わ

嵐山花

蟻通　神祇

上和

八九　一九

ゑ
い
ま

岩角

上奇ツヨク

伊勢や汝子にひろうたまくも給え

○ゆのへ世ろも世ろ社も

ふろふ世代よ。むのむろ

ゑ

ゑ

ゑ

立花抛入指南

生花ハ古より有ところなれども法式の立てありてびしやしハ東山殿義政公の御時よりおこりしとかり其後六角堂池の坊一流の中にて山水の気象を模ぬるにぬきんでて立花と称し其家の道となり其伝授によりて今に絶ず立花其中抛入の業の流の花をひきさり東山殿能阿弥相阿弥珠光紹鴎侍従光悦慶雲利休織部遠州の人々工夫をこらし抛入を今の体とハなれり

○生花ハ真行草の三つあり立花ハ生花の真なり法式ハ物格にとらハれず抛入ハ草より始り生花ハ行より生し抛入ハ大かたの意にまかせ其時の風情にまかせ花を第一とし出生の花を第一にしたがひ抛入のさかりを見せしむるなり

不二の山より出し池とかや。七世の孫まで道
こゝも神のむかし思ひやらるゝ

呉服　紅葉

あやの錦は唐衣。遠くも来つる他国の道
とひく糸はたの代そめてける

龍田

こゝに山とよそに海ありて波まにかくれたの
その秋の色。名こそ竜田の山の紅葉
先にながるゝ

耶鄲

夜ハ今宵のいさよひをながめ。四方の景色の
窓の戸を出入る道も。ひかり代かゝるよそを
かひハ盛やまに名にしおふ
さらにまたうの花のこゝろもかくやと思ふ
こなたかなたにかゝる

同　酒宴

汲むも汲く。いやましにいはひきくわの盃
かみよりもかくやらぬと色もみれやうにはてしなき

○花を生る心得たとへ
法にかなふても見ぐるしく花
と器の釣合あしき花を
おいて生るべからず
体用あひ応して取あはせ
ひとへに利根と申すなり
花の姿かたちを作るは
我心に備るかたちなり
あまりに作りすぎてしほれを
はづべし
○立花と生花と大小の差
体用の次第ありて
花と七つの枝の心
一体ともなりて立べく

いはふこゝろあるうへは何をかおそるゝとなきに
よそのしるし見えける恵の露にもれぬ
たのしさは、
いよ〳〵やすきべき

護法　賀　神祇

上和
君は万歳を重ねて松のよはひよ世の坂流れ
むかしの懐奥の名なりし翁女
つたへきく仲の神恵に信あらば
やすからぬ事はなき

猿通寺　賀　婿姻　誕生　元服

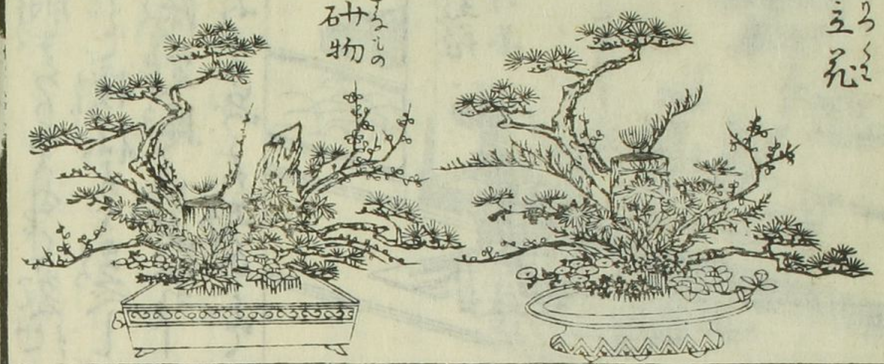
朧なる月のかげにも
ひとしほ梅の香もふかき
添ふ流れのうちもしら
ふかうらにいまさかえて

上和
御子孫も繁昌御寿命も長く
松の代かけて花のみさかえも

御裳濯川　神祇

上海
草も木も我大君の国なれば
神と君との世にもまた
祝ふとしの若水や八島のそと
も浪しづかにて吹風の音もあらき
天津神のめぐみこそやさしく

立花



四季謡之部

右近　梅

上の句
もゝすもゝ右近の馬場むこのまうらけも
白ふや朝日の春の光りもあまねく
神乃御幸の袖ふりて。松も木ちる梅
うゝのぷらうえもみくてこれる舟乃うつ軍
下ハ二ハ月もゝ。ゆうえやいるはうらん〳〵

和
ツヨク上句
実枝とやむいやきをたゝ二ハ二ハ二ハ二ハ

雲林院　花

ぬ人のさ色悔むもこゝを情あり。ゆうつの
毛むしあそび柳桜をこそ見せ。邪そ
春のぷうきるく

鞍馬天狗　花

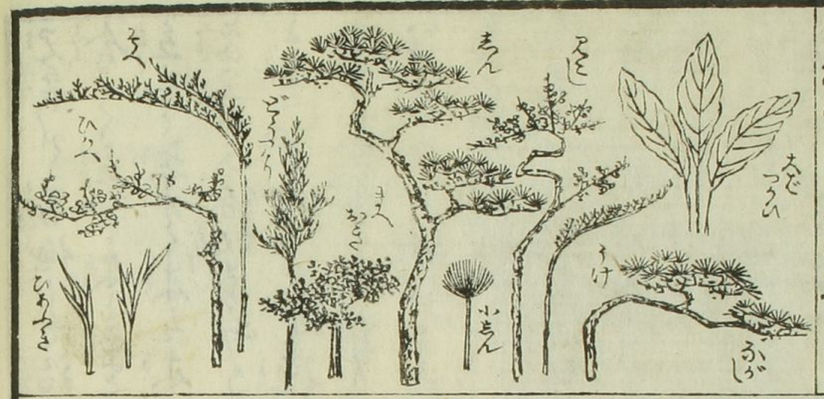
上和
花よこそ春の風くあり。人にひ枝とる
初〳〵浅いるんうらはまに色そふなし
そのぷ。ゆうはてこひまたんうさよ

和
上句
四条ぷそのうぷらにゆ〳〵男女さん

熊野　花

ア去〳〵く言俺〳〵て約
合〳〵うべし木〳〵まと
立迫〳〵ゆ〳〵木〳〵木
まい草の緑切ざるやう
ようべ退ぶそいふも掃
やう〳〵出木ろもけりのう
いげ〳〵ても一神ひづく
ろの人去〳〵両瓶のうれい一
知よおのても約会不約会
にう〳〵ぶうて。うるふ一
流れる家ゑ対べ〳〵
○春い新〳〵旅ゆふ掃
一瓶の中ろひあうう
ふ村ゆてうぶうるぶ

立華七つ道具花ちらくの指南



どひ。絶めく花夜神とけ。稲て紙を忘
の。ぼうとうて八重一重。咲九重の花盛
名はゆ美のけさうかく

月　花

上和

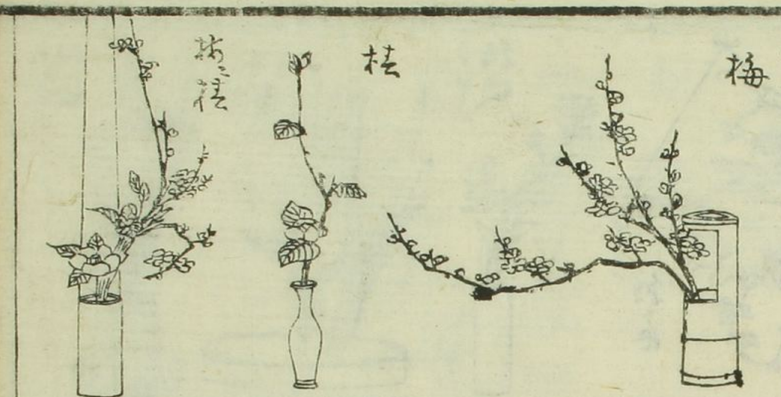
ちらかけ稀ちらぬ。立出そうの雲。
花やあらぬ初櫻のさとん林下ろ

月　花

上和

いすりのとうすめちらけ。あとうしとの
秋ま花の春い清水のさ。ぼあたのり

拙入生花の図



ぎ春ちらけ花さう

八　鳩

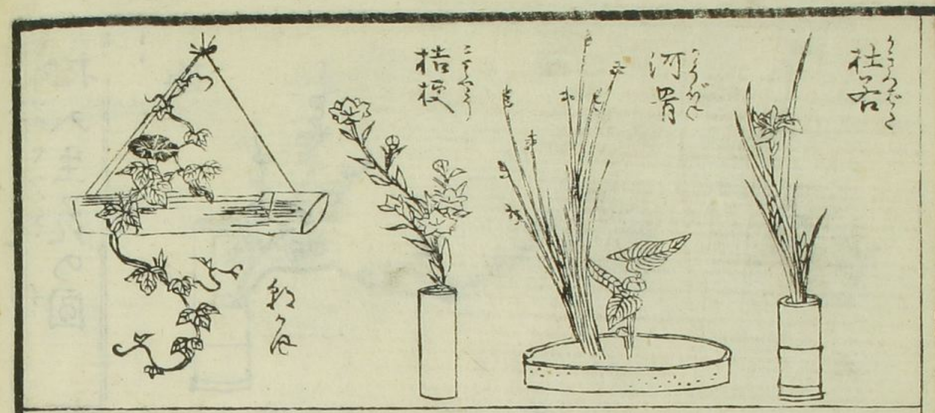
上ツヨク

ほとのいとに風も波乃ぶ。霞ちらておゆ
くやあまれ。ちゆのくとみてのこふ
ダうし。風ちものちなる。ぎや色とざ
ちふんく

二人静　若菜

上ツヨク

ぎの色春雨ふるとも。ぼさうとて
乃野辺の雪ぼかる。草とん今いうあ



りてしまし。春立といふ。ことにこそ
ふもうたてなる白雪の深沢にとうるとく

西行桜　花

上海
そらにうさんする其をねうとにあるさまり
ゆく日数庵で。ぬしやうしのそうるとや
風よりまりて花のうしろ。ちるもちらぬも
上海
かぜのうしろにうるる。つうかく

上海
日ゝゆくうねるなるや流生のそう

ゆ月。ぬしの端白花松
風ねとうるぬ木のりに。ちはや
そうふ結庵うく

和上
花衣
はやうんかのみは梅花雪ちらしく
木の本とうるうるうる紅。ぬくよは
ぬかのもは春ゆりの春もうのこと
ゆうるしはるうる紅のうるく

竹生島

露し○夏は草花の音
さきあるを水際ゆるぎて
涼しく挿べし○秋は林
しく○冬は室もの体
に得あるべし
○挿花は一種二種
三種にるざるの床の
広く挿れ入の大小を考
相合のくせるなり
○花をふるの小まを見て
前に用わざるもの四花
四ふ六花六をふ又一花
一をふと嫌ふ但し花二
所四房なれも用ゆるなり

名所共あれ数ふ浦山かけてあらひまとえ。
光るの花それの昔ながら山桜まの入
江乃舟よりひさげよせてえんく

小塩

ちりも世に花は行きぬ花さかり四方けし
しかも一声かつ花みちを花かまて勝る
花をさそひゆうな花ひそかにそ花るく

氷室

かかるぬやむむろの山は外をまうかきれ氣

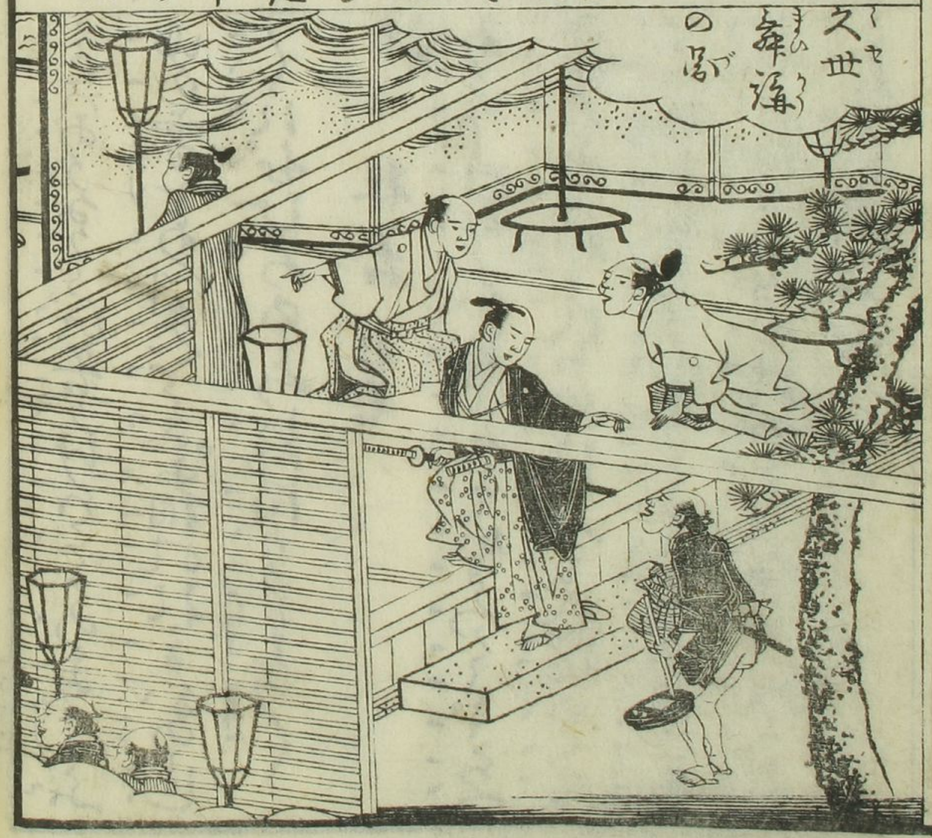
出生花もつとも之へし
○五節句の花
○元三は梅水仙椿
金仙花福寿草
○上巳は桃柳萱草
山吹桜
○端午は菖蒲艾
石竹
○七夕は桔梗仙翁花
女郎花萱
○重陽は菊萩
鶏頭花
者花用ゆべし
○祝言の花は嫌ひするむ

色はあかみかけこのまうふ
ゆの雪とあいさぬ玉霜のれしまるのと
くにむむろの花清めるかく

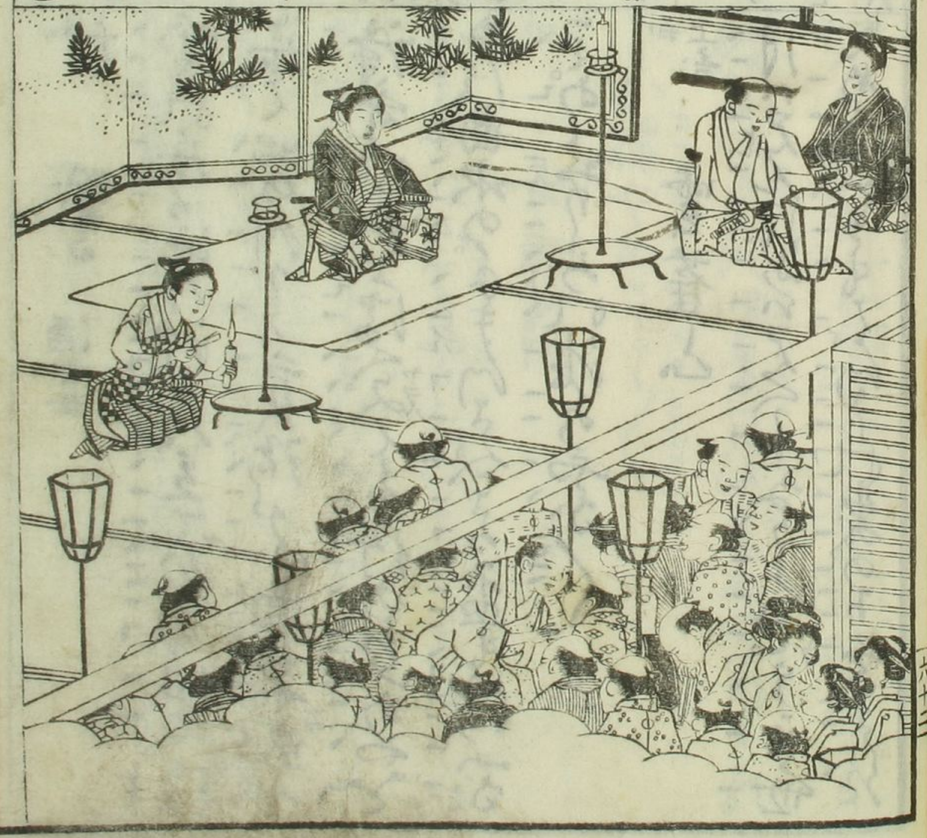
杜若　杜若

あらるかあるか藤そてかさねとことく
の水乃あさかりに昔し人も八橋のくも
て亦わそたわうろとそもさひ今若
紫さは名のの花やそてるにぬるて
こうふく

種枝をうえるべし時分
○梅後に赤さきたる花の
ようなるを時と
○柳花生る事はなし
元会よりし
○二月切る上下に花の
ようなるものに生じ
生じ花の色元会
なると仕じ上の花一輪な
らば上二輪とよりて二花
咲まるぬ中にとじ
○耳掛のある器に年の
上孫の上へ枝をさし生じ
こと



○南天花生る事四月頃
枝と生じ
○梅花生ずいまと花と
十文字になるべきなり生
べし海松と用いと花の
水と折べし生んとす
あふ蓮と水に浸すべし
○風炉先のうえ枝生じ
あまり枝とたるべし
○早下にうえ早の芯に
さしめ中に生じ
○梅みな出へれらし
半ばり咲いて用いし
後二番外る方に極と



一 すぢかけると申すと紙先より用ひ軸先は客に対するやうに掛べし並みにして花と軸へ掛べからず客の左りよりかけべし

○掛物並て後乃花を生る掛物の後の並花入横物の後は掛花入掛べし床の前は小掛前にするべし

○馬盥花は掛物の右にかけて生べし

○根ありのよいものびたちかの大掛前の花そて平と床の前は小掛前にするべし

花入をもかまへても申さず先めるらは直掛て茎本をも茎のあはひゆやうおも盃に入てかよふかく申と可さるべし

○花の見やう先とうしきてもとて根元をとゝのへて挟すべし

掛物掛様叢 表具巻

○床に掛物を掛ることは客のあるべし先皆と幾次に左右掛右をそ掛なさむべし幾やれ先掛の中を

和 上ゲの

酒宴

鶯の宿る池乃汀に松立て千代も似合住居く水の川も流れも面白や盛る

詩哥の遊と宴の管弦の声あやと

すゝ曲水の流に名高き盃も浮めて

かゝるおもしろの酒宴やかく

和 上ゲ

雲雀山

月は見ん月には見えしなりしへてうき世

とめるは知もちの袂のなるゝ

いろ花をうつりてうつよ月は向ふく

結ぶ月日のめぐりはやめてなるく

まる猶やめかさく

和 上ゲの

女郎花

ふまめ花をとるかとしらろめくや

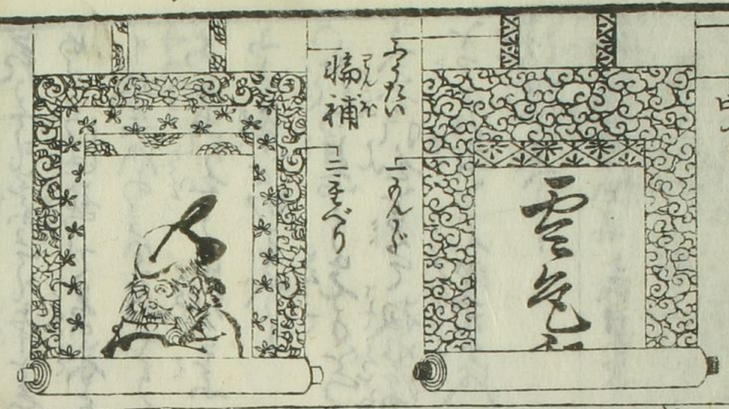
そふみんじようらうとしける花の名をたよろ

いらうと契らんのれゆんのうり枕はなれそ

ちれ衣よのもありと袖をとぞやく

雨月 月

表具名目



和上高千

打ちもの秋ぐりの。こゝの秋中れ行月の。
二ゝ里ゝ外ゝとも乞ゝ乞ゝ秋の空。雨ゝ
又浦湖ゝ月あとゝを思ゝ

月　月

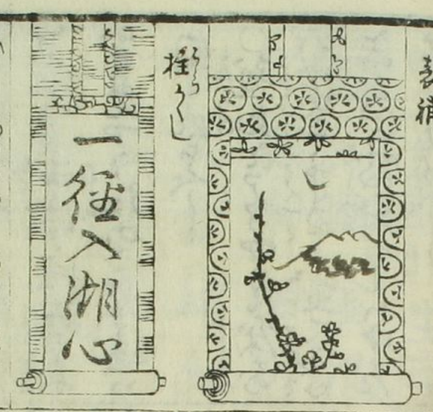
和上

うゝ世のゝゝを賜ゝ女ゝ風ゝ宝ゝ衣
搖ゝ身ゝ行ゝ秋のゝゝよ
衣月ゝゝゝよ

月

和上

木の葉ゝ衣ゝ他のゝ。ゝゝゝゝゝゝ



用ゝ風ゝ月ゝと世ゝに逆ゝ
打ゝ行ゝ行ゝ行ゝ
世ゝ毎ゝ風ゝ月ゝ
行ゝ行ゝ行ゝ行ゝ
と右のゝふ持て咏ゝを
名ゝにゝけて打ゝとゝめ
のゝゝゝ世ゝ用ゝ

ゝゝゝゝゝゝ

方丈のうちにかゝる言て
床まはり訪ようけむ
竹を挫掛物の軸へあて
とりけさうくと杢げうに
下し斜にうちかけたる笞
竹して画しぼに挿べし
納る時ふたをひげした
とよぶし中流にも嗅床
の主の人の切のごく違い
ぬりによべし
○釼抽とつうるも床お
乃横をすべて立てあて
とうへ指對すべく中た
右とすべし

ちよの梢と添て皆く休ミ舎や

魚 上音 融

雪とのミはかりてさぬる月の暮を
むら秋とそゝきミて松の風待ても私身の
うくと舎てある塩釜の夜秋さむし
ゝらんの秋のゆふ風ぞふく

中和 上音 阿漕

物のうれも不になりてかりうるぞまよへれ
あふ浦風もぞよいいせのあのかの

男女名頭相生字

木	火性人 大吉 木水吉	國	金	銀
久	粂	牛	九	元
谷	幾	吉	義	亀
奥	与	京	岩	熊
勘	光	鶴	彦	権
喜	駒	儀	磯	吟
源	寛	又	菊	玉
火	土性人 大吉 木火吉	忠	鉄	治
竹	左	多	長	良
丑	惠	藤	利	林
力	六	龍	貞	定

さとうゝ関の知られやくゝも含
経にうつりてそのうまの声をされ
と中さ仲やまん衣架にかゝる
今ふいそかりき

和 上音 三輪

秋さむれ神のうちのミね松風かり
うく本のゝうりくふれの杉ううかり
や用んまうひそのとをもとも問
へてあるるしさゝ行てさかし

徳	宅	来	土	又	恒	要	孝	宇	一	金	七
全	重	大	金性人 大吉 土火吉	祐	伊	用	由	栄	和	水性人 大吉 金土吉	惣
游	理	斎	服	喜	玄	英	延	安	幸	勝	辰
浪	精	連	乙	益	兼	優	豊	与	鶴	次	角
傳	丈	達	虎	好	寅	喜	為	揚	常	才	小

和上 松虫

盃にむく人の哀れさをまさるや子が年の

秋もしかも松虫の鳴れたるや尊き

草のいほとそ打かねかなしてやいね

ふる市の月のかりなる秋し

和上 須羽 卓允

いにしへなまこはらの哀に鳴る草花の根と

て埋もれ行を秋かなて枯野ふとるの虫の

声もし花を生むからほと

銀	新	作	仁	松	水	豊	武	文	万	民	百
助	周	尚	香	孫	木性人 大吉 水金吉	邦	兵	千	満	律	八
巳	清	藤	庄	蔵	福	弥	源	麻	芳	卯	房
吟	石	浅	正	常	林	茂	保	重	末	命	牧
種	時	市	政	秀	平	梅	濱	米	馬	与	繁

冬

上 鉢叩 雪

ちるは雨の木のもと見れ雪のおちてもと

稀かるる月の世かなり花のや流れんく

和上 竹の雪 雪

いかも兵山におかる稀もし雪の月のかさ

よ花の声をたすやむも歎く雪の冷る

いふを生かさぬ雪かなりたるらん

ツヨク 三笑

寒きや霜かよの川の朝の水。野山の草れ

大日本國盡

五畿内　五箇國
山城　州
大和　和
河内　河
和泉　泉
摂津　津
東海道　十五ヶ國
伊賀　伊
伊勢　勢
志摩　志
尾張　尾
三河　河
遠江　遠
駿河　駿
甲斐　甲

[illegible]

中和上ゑの

氷[illegible]

[illegible]

賀之部

上ゑの

養老

[illegible]

伊豆　豆
相模　相
武蔵　武
安房　房
上総　総
下総　下
常陸　常
東山道　八箇國
近江　江
美濃　濃
飛騨　飛
信濃　信
上野　上
下野　野
陸奥　奥
出羽　羽
小陸奥　七箇國

[illegible]

若狭 若州　越前 越州
加賀 加州　能登 能州
越中 越州　越後 同
佐渡 佐州　八箇國
山陰道
丹波 丹州　丹後 同
但馬 但州　因幡 因州
伯耆 伯州　出雲 雲州
石見 石州　隠岐 隠州
八箇國
山陽道

長生の家にこそ老せぬ門ハあるなるに
是も年經る山とをさしてちよのためしかや
松みどりの色ふかみ水いはをまもりて亀とのぞる
山とぞいはふ末も久しかれし

後 上 同

袖ひちてむすふ手の水のけはひゆる山のね
かの花も葉も共にかれ花のときもかはらぬ
こころやすくもあらたまるらめ

精丸

播磨 播州　美作 作州
備前 備州　備中 同
備後 同　安芸 芸州
周防 防州　長門 長州
南海道　六箇國
紀伊 紀州　淡路 淡州
阿波 阿州　讃岐 讃州
伊豫 豫州　土佐 土州
西海道　九箇國
筑前 筑州　筑後 筑州

いくよをかさねてはいくとせ鶴清かる花
さかりの年ふる松の葉色まさる波ま
ておくるて万歳といのるなり

源友文

はるかにちよをまもりてたいしたまへてよろつ
よ久しきぬる秋の月まてすむ花ふうる
も老をしらぬ身はいはふとしみゆれなけい
神感もたのしゃし

九十賀

豊前　豊後
肥前　肥後
日向　大隅
薩摩　薩州
壱岐　対馬

和
かまくらにゐる年源いかつかめをこれをけ行
乃世ふんやをつかれ寿をめてるうきが
時とうかゝ

和
八幡
千代経て源氏の報をけくて寿を
家歳の家例すくゝ

浦嶋

ツヨク上奇
ハルコ
まさせる浦のうれしのそをりは徳と変
ハルコ
七世の孫にあるやも神の者にあるやゝ

家督之部

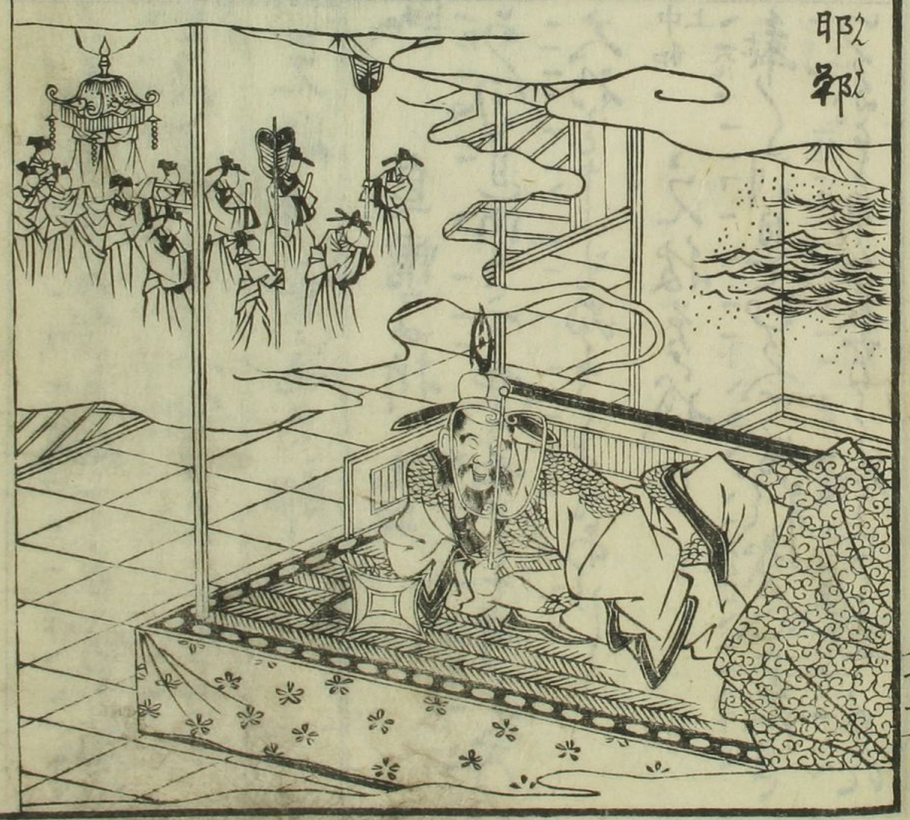
現在鶴

漁
上手
万代の例よそひく業の弓。竿のやゝ波
おそまりて。風ゆさうるれ代をやゝ氏も
ちうる時ありて。君をしれいおくの風と
けゝふるあらやゝ

ツヨク上
ハルコ
けゝをゆうをふう指現と弱をやゝまた
ハルコ
いおるをし神代に吳今の風ちあ

偏旁冠揷字畫

亻	亠	几	入	冂	冖	冫	凵	刀	刂	力	勹
匕	卜	卩	厂	厶	又	口	囗	土	士	夂	夊
夕	大	女	子	宀	寸	小	尢	尸	屮	山	巛
工	己	巾	干	幺	广	廴	廾	弋	弓	彐	彡
彳	心	戈	戶	手	支	攴	文	斗	斤	方	无
日	曰	月	木	欠	止	歹	殳	毋	比	毛	氏
气	水	火	爪	父	爻	爿	片	牙	牛	犬	玄
玉	瓜	瓦	甘	生	用	田	疋	疒	癶	白	皮
皿	目	矛	矢	石	示	禸	禾	穴	立	竹	米
糸	缶	网	羊	羽	老	而	耒	耳	聿	肉	臣
自	至	臼	舌	舛	舟	艮	色	艸	虍	虫	血
行	衣	襾	見	角	言	谷	豆	豕	豸	貝	赤
走	足	身	車	辛	辰	辵	邑	酉	釆	里	金
長	門	阜	隶	隹	雨	靑	非	面	革	韋	韭
音	頁	風	飛	食	首	香	馬	骨	高	髟	鬥
鬯	鬲	鬼	魚	鳥	鹵	鹿	麥	麻	黃	黍	黑
黹	黽	鼎	鼓	鼠	鼻	齊	齒	龍	龜	龠	



上ツヨ

鶏旅田

一位二二二

西	耆	貝	風
貪	鼻	馬	背
南	鼻	多	麦
嵐	鼻	歯	兪

九〻数

二二四	二三六	三四	三五	三六	三七	三八	三九	二十七
二四八	二五十	三九	三五 十	三六 十	三十一	三十二	四十	四十六
二六十二	二七十四	三四十二	三六十八	三十二	三十四	三十六	四十八	四十八
二八十六	二九十八	三十一	三十二	三十四	三十六	三十八	四十十	四十二
二十	三十	三十二	三十四	三十六	三十八	四十	四十二	四十四
二十二	三十二	三十四	三十六	三十八	四十	四十二	四十四	四十六
二十四	三十四	三十六	三十八	四十	四十二	四十四	四十六	四十八
二十六	三十六	三十八	四十	四十二	四十四	四十六	四十八	五十
二十八	三十八	四十	四十二	四十四	四十六	四十八	五十	五十二
三十	四十	四十二	四十四	四十六	四十八	五十	五十二	五十四
三十二	四十二	四十四	四十六	四十八	五十	五十二	五十四	五十六
三十四	四十四	四十六	四十八	五十	五十二	五十四	五十六	五十八
三十六	四十六	四十八	五十	五十二	五十四	五十六	五十八	六十
三十八	四十八	五十	五十二	五十四	五十六	五十八	六十	六十二
四十	五十	五十二	五十四	五十六	五十八	六十	六十二	六十四
四十二	五十二	五十四	五十六	五十八	六十	六十二	六十四	六十六
四十四	五十四	五十六	五十八	六十	六十二	六十四	六十六	六十八
四十六	五十六	五十八	六十	六十二	六十四	六十六	六十八	七十
四十八	五十八	六十	六十二	六十四	六十六	六十八	七十	七十二
五十	六十	六十二	六十四	六十六	六十八	七十	七十二	七十四
五十二	六十二	六十四	六十六	六十八	七十	七十二	七十四	七十六
五十四	六十四	六十六	六十八	七十	七十二	七十四	七十六	七十八
五十六	六十六	六十八	七十	七十二	七十四	七十六	七十八	八十
五十八	六十八	七十	七十二	七十四	七十六	七十八	八十	八十二
六十	七十	七十二	七十四	七十六	七十八	八十	八十二	八十四
六十二	七十二	七十四	七十六	七十八	八十	八十二	八十四	八十六
六十四	七十四	七十六	七十八	八十	八十二	八十四	八十六	八十八
六十六	七十六	七十八	八十	八十二	八十四	八十六	八十八	九十
六十八	七十八	八十	八十二	八十四	八十六	八十八	九十	九十二
七十	八十	八十二	八十四	八十六	八十八	九十	九十二	九十四
七十二	八十二	八十四	八十六	八十八	九十	九十二	九十四	九十六
七十四	八十四	八十六	八十八	九十	九十二	九十四	九十六	九十八
七十六	八十六	八十八	九十	九十二	九十四	九十六	九十八	十
七十八	八十八	九十	九十二	九十四	九十六	九十八	十	十二
八十	九十	九十二	九十四	九十六	九十八	十	十二	十四
八十二	九十二	九十四	九十六	九十八	十	十二	十四	十六
八十四	九十四	九十六	九十八	十	十二	十四	十六	十八
八十六	九十六	九十八	十	十二	十四	十六	十八	二十
八十八	九十八	十	十二	十四	十六	十八	二十	二十二
九十	十	十二	十四	十六	十八	二十	二十二	二十四
九十二	十二	十四	十六	十八	二十	二十二	二十四	二十六
九十四	十四	十六	十八	二十	二十二	二十四	二十六	二十八
九十六	十六	十八	二十	二十二	二十四	二十六	二十八	三十
九十八	十八	二十	二十二	二十四	二十六	二十八	三十	三十二
十	二十	二十二	二十四	二十六	二十八	三十	三十二	三十四
十二	二十二	二十四	二十六	二十八	三十	三十二	三十四	三十六
十四	二十四	二十六	二十八	三十	三十二	三十四	三十六	三十八
十六	二十六	二十八	三十	三十二	三十四	三十六	三十八	四十
十八	二十八	三十	三十二	三十四	三十六	三十八	四

二一	天作五	二沉一進
三一	三十一	三二六十二
三沉一進		
四一	二十二	四二天作五
四三	七十二	四沉一進
五一	加一	五二加二
五三	加三	五四加四
五沉一進		
六一	加下四	六二三十二
六三	天作五	六四六十四
六五	七十二	六沉一進
七一	加下三	七二加下六

（和上京）
花さかぬまはなるよたに
（和上京）
枝ひろの世の情にや。雨いろ〳〵○とけ若
一樹の陰と笑ひけり

孫栄　自遠

（和上京）
京にいるあり田舎もの又郡人のんさ
ぬはなく〳〵道ともとめて言ふまま
ものぬせんや

鄙川寺　日

花月之部

七三	四十二	七四五十五
七五	七十一	七六八十四
七沉一進		
八一	加下二	八二加下四
八三	加下六	八四天作五
八五	六十二	八六七十四
八七	八十六	八沉一進
九一	加下一	九二加下二
九三	加下三	九四加下四
九五	加下五	九六加下六
九七	加下七	九八加下八
九沉一進		

（和上京）
花さかぬはなんといひと里ひつ
ちるもちるも後のよろづ桜ぬ
と思ふ〳〵ものはよろしさひ
きてるこそ花とおもふかな

（演上京）
田村　花

一本の桜のこと
桜のことをそせいはこそひ
九重のうつ。なもおぼえのつ。

時をとゝ人ゆゝもそ〳〵ろ〳〵

月

いなくの春も中なへてのとけさかけそ
有明のつゝみもそなよ高つゝみ面影そうへや

うゝ和ゝ海のそゝ人や

月

はるゝ本のまにゝる月の雪のゆる秋風
のさゝそゝ人まゝゝゝ

[illegible]

上ツヨク 実やう[illegible]

[illegible]

和上 [illegible]

[illegible]

中分上 [illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

和 [illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[

もこう殿出給へん

小督

上和

月やあらぬ春や昔の春なれと

琴そ問しらぬ袖の涙かな

うはの空ぬるあるあるの琴の音に

ゆくへ知はいかに

上和

かくふとも

若菜

上和

ふとはしと成くるあく月のかたそ

波風はやくたちさわぎ

さいかのあらしはのあん

とかなすとうや通こいち

ちいとたつ。ちる

あるは池中の水鳥

つるくはのん。出

いるるんとを敷この袖

とは秋のこそ

わくかえるあ

わくこふのこ

とのく成ぬ有る。俗語ふ

女郎花

上和

こふ世界もうかるあ

月のあれおもの

まくも和とふ

秋の月をいさやなうえ

上和

秋羽

のくもの月の秋

よりて紙も出る新

秋の月をいさやなうえ

安達原

酒宴ノ祝言

さくらの「上元」人
おなを春れ「上元」れ
「上元」うたいはる秋のいと
とをたはふるをや
「上ト」まちぬん「上元」今をと
ちりうるいをの
「上ト」ふる金れけるを
さと。「上ト」もたいのちは
「上ト」はるをふる「上元」おひ
「上元」あれ浦ふる孫

和上

盃

梅ゝ

盃もうゝひ出ることにあふをうゝ
しさこのとのふはふをうゝ

一角仙人

和上ゝ

ゆゝへの月のさんをうる。「上元」生身も
仙人乃。おはをのあ月ふ巣れを四。
ゝをうゝ。「上元」ふるも代ゝ猛めゝをちをうゝ
ゝふをそは「上元」免ふ

巴園

「上元」とのゝひゝうゝ「上元」ふをさわ
「上元」ゝ

淨瑠

いて其時の淨瑠ゝ梅
さうゝわをあしをふ
をうゝ「上元」んゝかで梅
四ゝつちゝに梅井ゝう
つけふわをゝをわゝ「上元」て
をゝの「上元」ゝ孫ゝに
いゝるまををゝわゝう
ざるゝひつのをゝうゝん
どんゝうをゝ人孫をい

春ゝ「上元」ゝ紀をのふをゝちゝ「上元」ゝ
ゝ「上元」ゝ
ゆふをゝ。「上元」ゝ
ゝ「上元」ゝ免酒のをゝひまをゆをゝ
のをゝ「上元」ゝ

耶鄭

ゝ「上元」ゝ「上元」ゝ
くゝ「上元」ゝ
ゝ「上元」ゝ
いかゝ「上元」ゝ
ゝ「上元」ゝ
ゝ「上元」ゝ
ゝ「上元」ゝ

祝言

老松

強上

よろひとさつくるしまのたかとをとはかれと
ときはなる神のしきまもとはかはるとも
梅もひさしき春をめてたう

白樂天

強上

きんに育うるや神とまつ
よのこころやすとや

猩々

ツヨク中コト

よもいさしくよろづ代までの竹のかを

盛久

いふ盛久かうくわんの手
ちらの侍武ちやれたの
しやそれらんぬんの
ぬんとなりてうせふ
おもかけうしてけりの
ゆうろれはうえんにおて
ぎをの盛久一世一ぱいかて
のうまつ東ちもかくと
なしぬ又見い枝のわ
かまつぺ一さいの四ふ
ちをうて

ツヨク上ノ

ちけ。くえんもぱさんの名をもかたらぬ秋
の秋はさうまつけもうふく入はふるこころが
ゆかしいよるくと。ちひはふるはうて
はいさやぬ若ちをめてふ多徳

嵐山

ツヨク上ノ

むらもかやくふ年の樹ひうもかく
やくふ年のさうはぎ春社人ふ

紅波

七詩序

[illegible]

天下代はりおさまる天下をまもること
[illegible]
治るとうんせいらくそめてくれ

白髮

[illegible]
[illegible]
御代ゆたかなる

養老

[illegible]
かへるもよい御代なるよ百歳の
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
代を

付ひまりうるんわり
ち把敬よ武盛い忠の
者ゝゝ

嵐山間

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

蓋の袖の面白ちぶぶ
やろこ海ハとれくぞ。
一のいとくこのなん
ゐく。三よろこ海志
なのとき。やんとく
こそゆうぐんれ。ゐ
りくとなぐもつ。ま
くのまくとすふ。そく
さい國ふくふぎんゑ珠の
くれろ。ゐると志とお
志ーやのゆ。れゐ秋やまセ
いと。俵とかよて面くふ。

金札

歌仕おろんむ簾の弟さ。おろ
も。むすまこ。ゆうゐ御代ろそ
ゐれ

上強

岩舟

金銀珠むハゆ。うて。ゐろと
くゑ津守の浦。すきと守の
。神ハ千世まくゆうゐ御代
とそなりゐ

俵ゐくくゆんくふ
俵とかく絵く面くにゆ
しうなるきやそんん
きやつくくうや

摂待

扱も八幡の合戦。今ハ
よとたしてに。紙敷の二男
能やゐる敷絵と名のつて。
小舩ゑ乙ゐ京破まちく漕
ゑセ。いふ源氏の大将源ゐ
義経ふ。矢一節とまちセ
ん清てたゐとのくふ。かう

高砂

神と天とゆ。みちすくに。地のうる
よゆくへくハ。乙れそくん志ゆう
らくのまひ。ゆくくん志の志
衣「乙」くひ。ゐよハおくまとくらひ。
おさけるゐよハ。志ゐふくとくき。
ゐ乙ゐくれたをとて。ゆんさいらくゐを
食代のゆ。ゐひゐひ乃ゐ風さうく志
ゆ志そくゐ。むく

殷物之部

鵜飼 鵜之服 芦苅笠之服 海人玉之服 熊野清水清 松風汐之服

鵜飼 鵜之服

中和上

面白ものさまやそこてもきゆるかてまふ。
ゆくゑくうとものいはすかいさとすくひ
とほるくくとくはいはくもむくひとの
ちはよもくくく

きを放て乃射板をとはまとを先うきを放てらんとて射こと。
後にひく引て戒太の。内ゑ背をれ手指にとりて射むとて其付よ次信れ。馬のとゝ〳〵系出ん手ふ出んとやうも。大事なるまとをとゝ〳〵てるとうもとをとしれ。やて弦太い馬をとを。

次信を陣のうしろふうを出いふ次信いふくしとの射こもだんざよりはまろて後にもれくるぶんを面月をうれ出れていい。「扨こと付よ弁の忠信をはくとうろう」「あゝ愚や。太信い日のもとをはいくかゝる」陣をまとれ。結を敵の意を菊王丸。次信の

[illegible]

[illegible]

[illegible]

あんかうさまと涙をながしてうらみをいきりてよと合せなむやもとしの親者よりのかぜ合てうひのへてたゝ無のつるんとひさいまあく流えの中にひ入ぱうくんとそのいろ〳〵長ほうぱくもの西氏深えて。かうんとうれぱ西こ祈ゆつくゆ巣てたくしるかなんへぱけるゆ紙と取ゆくちけとぱさ切ゆ氏れくこ先紙をとてそ巻くぱる流えのるくひよ者人といもこれゆり

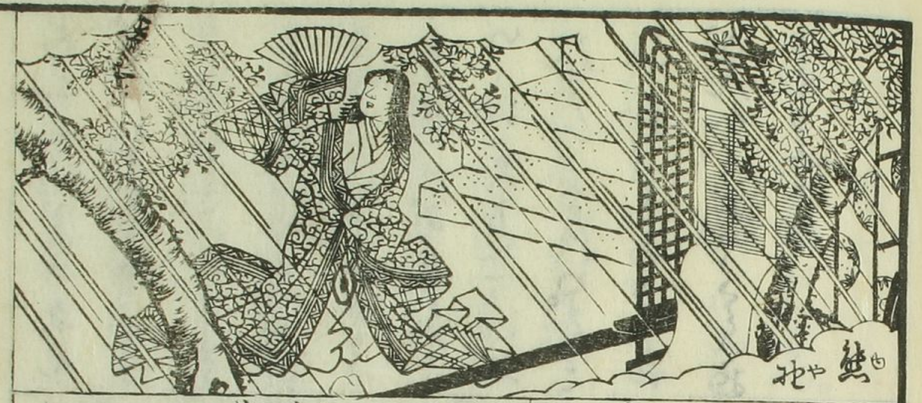
くしたもうくかしこかの男〳〵ふ二人ようすをれもうひ出け海れわさと見えるくゆうしろ。りつゆむにゆり人ゆ。いやくゝらくいとろかさうのるくゆ。入りや人にかくんくこひぬびんよいあくくくゆ。えて門ようせ二力さゝゆのまく海にもへめくゝふ匹ら扱い海うみてあるこ

いちらにくゆくゆ流かくやくそゆ縄とうころせゆぱくゆ收へりよりうろ玉をもこに海主人い海とゆらゆ人郎そり

和上歌

熊野　清水浩

巴御前女系はそのうへぱくぱらたやく男女させんひ。数めくゆ衣てとそゆ孫て紙をもの。ぱうとうへて八重一重。咲九重と思ふ石ぬ多ものゆ吉キ海系者と思ぱぱ思ぬれゆもく。車ぱうゆろく



[illegible]

[illegible]

[illegible]

みるとは仏果のゑん
ぶしの月のあけぼのゝ
ゝまのうちとはいさゝか
ありぶをはらとふとは
まのうかゝへをゝ
とう門門あくまぬた
いけこゝろを海あ
なまんゝるれわぶゝと
ひゝあゝをゝとゝゝ
ぶんゝゝゝめてゝゝゝあ
がゝりみてい

一ひゝくゝもゝ出ゝゝゝ松のむゝゝゝゝゝゝゝかゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]

感陽文　[illegible]

[illegible]

烏帽子折

いて其ゝ[illegible]の御五位の時[illegible]八幡[illegible]の貞任宗任を御退治あつて[illegible]御上洛あり御[illegible]

てけたゝ折の[illegible]をあらとまつ[illegible]仕あり[illegible]御出[illegible]おぼめさま其時の四恩[illegible]つて[illegible]

[illegible]

[illegible]

安徳帝ぱく如意宝珠
とうまれたりぱしゐ宝珠
身にたんと。二月初午に
熊野権現ひとゑ白
あつて未病の肉にきんぐ
ゆさまに。のうん珠を
わくはくふんわうちう
うえん半ーそい

此外限物小奇物語美
曲論義渚慶賀佛
事酒宴等部と多
中曲淫い謡曲集一冊に
委ー合セ見ばふへー

画工　速水春暁齋

文政六癸未歳仲春

京二條御幸町西エ入

山本長兵衛

谷澤姓
奥田姓
山田姓
林姓

今澤姓
奥田姓
山田姓
林姓

攻
細川